

人間擬きは異世界で静かに暮らせるか?

(^・ω・)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人の可能性

そんなものしらん

怪物は最後に倒されてハッピーエンド

くだらない

じやあ軽くいこう

そう、だれも苦しまぬない

ただ純粹な『覚悟』の物語

男は平穀を望んだ
女は世界を欲した
姫は愛憎を選んだ

これはちよつとした奇妙な冒険の第二幕

目 次

第一話 転生なんて糞みたい	1
第二話 second話 白夜さんは静かに暮らしたい	9
第三話 ドライ話 白夜さんは静かに暮らしたい 2	12
第四話 白夜さんは静かに暮らしたい 3	18
第五話 這い寄る爆弾	22
VI話 天元の魔術師	27
第七話 十秒前の死	32
第八話 魔女？魔法少女？いえ、魔女っ子です	39
第九話 賢者Rさん	43
第十話 日常	48
月紅 話21第	52
P V VODOO KINGDOM	57
13 『殺し屋の女王』	61
法皇の縁	65

第一話 転生なんて糞みたい

2019/4/30

いつものように朝8時に起きる
そういえば今日は平成最後か
ああどうも。

俺は・・・・やべ
本名はあれだし偽名は全部外国語ばつかだし
うん

私の名前は吉良吉影
なんか救急車で死ぬからだめだな
普通にしようか

わしの名はまあいつもお主ら知ってるだろうし白夜さんでええや
ろ

いい名字思い付かんわ
青山ブルーマウンテンでいいか
嫌だめだな

それにもしても今日は外がうるさいですねえ

ガツシャーン

大きな音と同時に黒塗りの大きなトラックが突っ込んできた
この時俺は思つた

俺の家に何突っ込んできただと

当然俺の家は改造済みたかだかトラック一台どうしたんだ
まあなんだ、酔っぱらいの運転手には悪いが潰れて死んでくれ
俺は貴様の肉で朝食でも作るとするよ

タンスからワイングラスとそれほど古くない赤ワインを取り出す
何年かや何処産からは君たちの想像で決めてくれ、俺はあんまりそ
ういうのわからないんだ

取り敢えず古いほうが個人的に良いとしか思っていない
ドゴン

と、大きな音と爆発音と共に人体が窓ガラスに張り付いていた
どうやら投げ飛ばされたのだろう

見た感じギリギリ生きてはいる

ほつとけば死ぬな

そう思いワインの栓を抜きグラスに注こうとした時、重要なことを
思い出した

音楽のつけ忘れだ

着ける音楽はそうだな。

キラー・クイーンだな

カチツ

うん、これでいい、今日はのんびりするか

おや、俺のガンプラが木つ端微塵・・・まだあの運転手生きてる

かな

「・・・・・」

運転手はこちらを弱々しく見つめてはいる

応急処置を施し救急車を呼べば助かる命ではある
だが、俺は善人でも凡人でもない

悪人や野望を持った大馬鹿者の味方なんだ
運がなかつたな

結局貴様はここで生を終えるのだ。

愉快だなあ

やはりこの目だよ

死を悟りきつたこの最後の希望にすがるあわれな目だよ。

おつと、これ以上はいけない

近場にあつた瓶を片手でつかみ。

窓を開け死にかけの獲物を引っ張る。

「た・・・・・たす」

「安心してください、すぐ楽になりますよ」

そういつて破片を取り除き瓶の中身をぶちまける

「あああああああっ!!!!」

悲鳴か？

!!!!

いいよな、この希望がなくなつて絶望に染まる色
別にガンプラ壊さなきやゆつくりあの暖かいところで寝かせて
やつたのに

まあ、なんだ、遅かれ早かれ死ぬんだ、いま死ね。
ちゃんと楽になるように瓶の中身は薬物だ

人体の神経と過剰反応を引き起こして永続的に痛覚に刺激を与え
続けるだけだ。

「アアアアア・・・・・・・・」

糸の切れたように倒れたこの朝食の素材は倒れそのまま何も反応
しなくなつた

さてと、肉も確保できだし姉さんが来るまでに朝食でも作りますか
あ、その前に朝の一杯

・・・・・音楽も流れきつちまつた
しやあないもう一回だけ聞いてそれかでもいいか
カチツ

「・・・♪」

音楽が流れ終わつた直後

部屋に掛けてあつた刀で朝食を集めつつ周辺に飛び散つた血を雑
巾で拭き取りバケツに投げ入れる。

よし、やつぱこれいいな。

ループ再生して置いておこ
カチカタツ

切り落とした肉を縄で縛り
キッチンにむかう

少しだけ血がこぼれ落ちているけどいいか。

強火コンロの上にあるフライパンに肉を起き中火にしておき塩コショウやソースの用意をしておく

ご飯は昨日のあまりがあるから取り敢えずレンジで三十秒づつ試すか。

スマホを充電スタンドに起き、部屋の電気を着ける

そういえば今は焼酎切らしているんだつたな。

姉さん焼酎好きだし絶対起こるだろうな。

ポケットに入っていたサブのスマホを使い、LINEを起動する。

爆弾魔「白」姉さん今焼酎無いから欲しいのは自分で買つてきて、
お金は後で出す
にやる 了解☆

うわー、はえ

あ、やべつ、焼きすぎ・・・・セーフ・・・・ちょっと黒いな
スマホを後ろの台に置いておき冷蔵庫からだして解凍させておい
たソースをフライパンに乗せゆつくりと溶かす

ご飯の方はもういいぐらいに行けたな

さてと、後はどうしようか

生キヤベツでエエか

わしもねえさんもそんな滅茶苦茶こだわってるつて訳でもないし

さてと、一通りてきたが暇だな

よし、ごちうさ見よう

「録画録画・・・・やつぱやめ、まどマギだな」

BB channel (着信音)
ん?
ピッ

「もしもし姉さん、酒あつた？」

「あー、いやー、そうじやなくて家まで近くにトラック突っ込んですぐ
ど」

「あつそ、裏口から入ればここ人気少ないし」

「あ、はーい」

さてと、丁度ステーキも終わつたし、コップ持つてこないと
あ、やべ、頭とかの処理忘れた

取り敢えず布に包んで車に投げ捨てておくか

きゆきゆつとしてぽーい

よし、処理完了

さてと、まどマギ見よう

(。>ω<)ノマミツターウ

姉さん・・・・・

「姉さん、居るなら先に食べてていい・・・・・食べかけかよ」

「ああ、うん、それなんか違う食感ね人肉？」

「さあね、知らないよ」

「下手くそな嘘ね」

生レタスだけ丁寧に俺の分も食つてやがる
まあええか俺も食べよ。

「ねえ白」

「なに姉さん」

さあ来るぞこの糞姉貴の無理難題

「ちよつと前からいまらへんさー、異世界転生つてあるじやん、あれい
いよね」

「そう? ガンプラも面白い番組もないし・・・まあ、道化は多いな」

「だよねー」

なにが言いたいなにが望みだ
わからん

「どうしたのそんなこと言つて」

「実はさ、私、一回死んで神様にあつた」

「んで」

「転生させてやるつて言うからアイアンクローかまして一回帰つてき
た」

「そうか」

「・・・でだ、白」

「ん?」

「行こつか異世界」

「だと思いましたよはい!!逝きましようかもうつ」

「じゃあ回収するね」

まじかよ、いま起こっていることをありのままに話すぜ

俺はなんか下らないと思いながらしてたら体から魂が抜けてお空
に回収されている

超能力とかスタンド能力とかじやねえ、もつと恐ろしい物の片鱗を
味わっている。

よくある場所

「イタタタ帰つてきたかのう」

うわまじで決まってやがる、白衣に羽のおじいちゃん、よくある神
様か、どうでもいいよもう考えない

「じゃあ神様予定通りチート能力貰うよ」

「ああ、よいよい、そつちの男はどうだ?」

「俺?うーん」

別に要らんけど

暇潰しに向いたものだけでも一応もらつておくか面子とかありそ

うだし

「じゃあ制限解放で」

「制限解放・・・・・つまり無制限に成長し続けると言うことだな」

「ああ、どうせ、静かに暮らすしやること無くなつたときのための措置としてだ」

「・・・・・え」

「は？」

「まあ、白がそういうのはしつたよ」

「え？ それだけ？ 他のやつらなんて平然と最初から無敵とかハーレム体質とかだぞいいのか」

「いいんじやない、人の勝手で」

「そ、そうかじやあ、初期の契約通りお主も欲しいスタンドを選べ」

やつたぜ

なんか話が裏で進んでるけどいいや

「キラーキイーン一択だろ」

「・・・・・そのとなりのお主の姉さん複合じやぞ」

「♪♪」

「・・・・・別にいいよ、キラクイだけで実質三つだし・・・・成長性

Aだし」

「ま、まあいいじやろう、ほれっ、終了じや」

ん？ 姉さんの気配が変わった？

「白」

「・・・・・なるほど」

「はあーよかつた、もうすぐ消えるお前らに言うけどな、お主ら姉弟はあの世界では邪魔すぎたからな、何度転生させようと頑張つても死がないせいどれだけ天界がそのイレギュラーに付き合わされたか」としてと、お試しだ

ペタペタ

「キラーキイーンはもう貴様に触れている」

「!?

「よし、ガオンしたろ勿論時間停止中に何百回も」

「えーとこうか」スツ

「待て!!今わしを殺せばあの世界の70億ぐらいの人の命も」

すまんな、この姫貴のせいで実はストレスマックスなんだ

あとキラクイ使えることに喜びを隠せないんだ死んでくれ

「姉さん以外の人間がどうなろうが知つたことか、いいやもうストレスの限界だ。押すね!今だつ!!」カチツ

起爆スイッチを押した直後神様が綺麗に膨らんでぶつ飛んだと同時に世界がホワイトアウトしました。

これがこのくそったれだけど愉快な人生の始まりでした

第 second 話 白夜さんは静かに暮らしたい

白く染まっていた視界が薄れ、世界が見え始める。

重力とは実にくだらない

このまま落下すれば死ぬではないか。

そういうや姉さんどこだ、座標ミスか？

まあ良いだろう、別にただ壁掘んで窓蹴り破つて入れば良いだけだ
しな。

「・・・・・シアーハート・アタック」

取り敢えずなんかあつたときのために出しとこ。
取り敢えずここがどこか知らないけどいいか、適当にぶらつこう

暗い廊下

ほんの少しの灯火を頼りにそれ以外の照明は無い。
時々遠くで爆発音と断末魔が反響してくる辺りまだ生命体はいる
らしいがはてさてどうしようか。

「・・・・・何か踏んだな」

足元を確認すると人の肉だろうか、まだ新しい何かを見つけた。
傷のえぐれかたからして何か爪で引き裂かれた感じの兵士か？
よくわからんが爆破するか。

「うう・・・・・あ・・・・・」

「・・・・・勇者の肉盾ご苦労、この先に居るのだな」

「あ・・・・ああ」

直後唸っているだけの肉は完全に爆散し、何一つ残すものはなく
なった。

あるのはランタンと小さなコインだけだ。

左手でランタンを持ち、ゆっくりと進む

この先で俺の平穏を乱しかねない危険分子がいる
始末しなくてはならない。

どの程度進んだんだろうか

少しづつだが金属のぶつかる音が聞こえだした。

ああ、居るな、数は5

さつきと終わらせよう。

扉を開け部屋にはい

そこには金の装飾に血のように赤いマント、瞳は赤く眼球は黒い、体はもはや人とは思えない異形の怪物

片や、そこには白と金をベースにした大きすぎず小さすぎない男、よくいる魔法使いな女と僧侶の男と戦士みたいな感じの全身を鎧で固めた男。

だがもう、シアハは左手に握られているんだ

「……なんだその男は、貴様の仲間か？」

「……いや知らない、あんなどす黒い何か、俺は」

話す暇があるか。

キラーケイーンを使い思いつきリシアハを僧侶の顔面にぶつける。

「?!」「?!」

ぶつかったシアハはそのまま僧侶を爆破し、地面に落っこちる。

見えてないな。

勇者も魔王も見えていないな、うん

「……どうした、急のさつきの人が爆発したぞ（無心）」

コツチオミロオ

「な、なんだ!?」

「貴様!! 貴様は何者だ!! そのどす黒いものはなんだ、人間ではなかろ

う

ひでえいわれようだ

あの頃とそう変わらないな

まあそういう目を持つたやつを俺は始末するがな。

「私の名前は……うーん、ここは白夜でとおしておこうか気に入つた偽名だしなうん」

「?」

「勇者様!! 足元にへこみ・・・・がつ!!」

あーあ、シアハ見てないせいで魔法使いさん吹き飛んで手だけになつちやたよ。

まあもう戦士もキラーキイーンに触れられているがな。

「!?

「さつきからワンパターンだな、もう仕舞いだ」

勇者の盾のように立たつた戦士を起爆し勇者もろとも吹き飛ばし、同時にシアハをキラーキイーンの左手で投げつけ魔王の心臓をぶち抜く。

「な・・・・・がはあ」

あ、爆破した。

取り敢えずこれで俺の平穏を乱しかねない危険分子は排除された。

「さてと、ここからおさ・・・・・

さすがに正義の味方は強かつた。

全身に破片とかがささつているのによく立ち上がる。

「そら、貴様の仲間の手だ」

「・・・・キサマア!!」

「・・・最後にネタばらしでもしよう、私のスタンド『キラーキイーン』は『触れたものを爆弾に変える能力』なんだ、そうだね『君のお仲間の手もだ』 カチッ

咄嗟に手を捨てつつ斬りかかってきたところでもう遅かった。

全身が膨れ上がり、爆発寸前の奴になにができる、ただ爆破して無に還るだけだ。

「シアハも回収しないとな、よいしょっと」

崩れた柱の下敷きになっていたシアハを左手に戻し部屋を出る。

もう、そこにあつたものは一人の女性の手だけであつた。

第ドライ話 白夜さんは静かに暮らしたい 2

宝物庫

流石に魔王が消えたせいか静かになつた、そしてこの大量のエリクサーよ、エリクサー病のわしですら使いまくれるぐらいあるな……だがな、これをどうやつてもつて帰ろう。

金貨だけでも山のようにあるんだキラーキイーンのパワーで引っ張るのは相当難がある。

布が欲しいな。

ん？ さて、よく思い出せ。

そうだ勇者だ。

流石に勇者なら四次元ポケット的な有るだろ。
この世界魔法あつたんだし。

王座の間

女性の手が捨ててある部屋でしかないが勇者の爆破地点付近を調べる。

「あつた、ぽつけだ……キラーキイーン!!」

射程短いけどスタンドつて便利だなあ。

白は勇者の鞄を手にいれた▼
血まみれだ、あとで洗おう▼

「（ノ・ω・）ノ」

宝物庫

よし、金貨入れるか

道中に落ちていた布の切れはしや鎧や兜の破片を縄とかで結び大きな袋にして金貨や宝石をキラーキイーンで引っ張つて袋に積める。時々宝箱があるからそれだけは部屋にポイ捨て。取り敢えず金貨入れよう。

・・・・入らん。

アホかいね

ただの鞄やないか、ラストエリクサーがパンパンに詰められただけの鞄かよ。

まさかキラークイーンでぶつ飛ばしたとき一緒にやつてしまつたか。

・・・どうしようか。

倉庫の箱がなんかをシアハで引っ張るか。

倉庫

・・・・確かに大きな金庫はあつた、鉄製の頑丈な箱だ。

だがこつちも中身がパンパンだよ。

魔物の私物だろうか。

棍棒や斤、ナイフまであるよ。

全部コレクションしたいな・・・持つて帰るか。

やべ、そうなるともつと重くなつてシアハ動かん。ほんとドラクエみたいなカバンないのか。

あ。

『あなたの私物異空間で絶対管理、魔界金庫。使用料1kg／100

00ペリカ』

ペリカ wwwww

こつちの世界じや高いのかな？

使用者

12／30魔王 お古のローブ

12／4フレイム デスササイズ

12 / 3 ヴアレット 人間の臓器100セット

11 / 21 魔王 先代勇者の死骸

11 / 20 魔王 NARUTO全巻

11 / 19 オーク キノコ

ワロタ

変なの混じつてるww

主な使用者は魔王か四天王つてやつかな？取り敢えず誰もいないな。

どつかにしよう方法ないかな？

カウンターの裏にあるかな？

『管理人へパスワードは4649です』

普段ならこんなカウンター裏はみないし、ガバではないか。前線に行つたのかな？

4649とパスワードを打つとガチャーンと大きな音がなり、真っ暗闇が見えた。

なんだこれわからん。

管理品『道具 or アイテム』

魔法のふくろ

勇者の剣

聖騎士の鎧

闘神の斧

大神の弓

メモ

取り敢えずメモ取り出そ

著者魔王

『よく考えたら何であいつらに伝説の装備渡さないと駄目なんだ、アホらしいし倉庫に管理しどこ』

p s

『よく考えたらこれ装備できるのだろうか、サイズとか重さとか結構すごいぞ、まあ、この金庫見つけたならくれてやる』

ワロタ。

取り敢えず魔法のふくろにつめよか・・・・・
お、いっぱい入る。

三十分後

「取り敢えず回収できる装備と資金と食料は回収したし何しよう
か・・・・家いるよな・・・・地図」

読めない

まあ、魔族用だしな

取り敢えず近場の要塞都市っぽい所行こ。

一応移動速度上昇のブーツとかポーションあるからいいけど普通
に歩いてきた勇者一行疲れたろうな、全マジックアイテムを金庫にぶ
ちこまれてるとかww

要塞都市？

T H E ・ 中世だな

煉瓦を積み重ねて所々に大砲か。

それも形からして多分カルバリーン？

「・・・こういう軍事都市の頂点になら立つてみたいな・・・毎日殺戮
兵器作れるし拠点防衛とか建設好きだし」

取り敢えず家だ家。

・・・・警備はうん。

キラークイーンで防壁のレンガの一つを爆弾に変える。

堀とかがあつたら射程距離的に無理だつたけど無くて助かつた。

「・・・・パワー足りるかな？」

左手からシアーハートアタックを取り出しキラークイーンでぶん
投げる。

飛んでいったシアハはギリギリ防壁の上に乗り、人間の悲鳴と一緒に爆発しだす。

「・・・・お、鐘が鳴り出した・・・じやあ、入りますかあ」

爆弾に変えたレンガを軽く爆破し城壁内部に入る。

内部は意外と近代とは言いがたいけどまあいいところまでいっつる。

まあ今はシアハが無数にいる標的に飛び付いて爆破の連続だから大パニックだけどさ。

取り敢えず民家はどこかな？

人混みを通りつつ時々人間を爆弾に変えては爆破を繰り返し少しずつ見て回る。

ある程度散歩していると赤レンガの地下に繋がっているタイプの家があった。

場所は結構隅であるが交通は申し分無し。
ここだ

「……鍵？ 無駄なことを

爆破して普通にはいる。

中には一人の男と女。

そうだな、ちょっと遊ぶか。

「な……なんだおあつ!!」

おお、顔面からぶつとばすとこんなに良いのか。

「ひいつ……だ、だれか」

「……おっと、旦那さんの血肉で汚れてしましましたね……私の名前は岸波『白』野ただの偽名名乗りです」

ポケットのハンカチ（爆弾）で女の顔の血を拭き取る。

ああ、この目だ。

この恐怖に染まつた目だよ。

いい、すごくいいよお。

あとはそれを殺意に変えれば最高の芸術品だなあ。

「お嬢さん、殺さないと……貴方もありますよ……あの人を殺したのは私、ちゃんと見てください」

「……あ……ああ」

そうだそやつて殺意を抱け、もうなにも見えてないと思うがいいさ。

突如女がこちらに向かつて包丁を刺しに来た、取り敢えずキラーキーンで部屋の外に放り投げた。

もう、目は爆破して見えない、耳も爆破されて聞こえない、嗅覚は血の臭いで狂っている、あとはただ殺戮を繰り返す爆弾だ。

刃物を持った女がもう無差別に襲いかかってはその最後の感覚である触覚で人間を斬りつづける。

最高の芸術だ、誰でもいいキヤンバス持つてこい。

「・・・ん？誰も触れなくなつたな、下らん」

芸術をキラークイーンで蹴り飛ばし人混みへぶちこむ。

突然の出来事と恐怖の声。

ああ、いいなあこれ。

姉さん、やつぱりこれ楽しいよ。

薄茶色の土の道は赤く染まり。

無数の人間が血に倒れ伏せる。

だがその夢ももう終わり。

現れた衛兵が芸術にその汚い槍を突き刺し動きを止めた。

まあ、アドレナリンとかがもう暴走している人間をちょっとやそつてでとめるか。

動き出して裂け始め

切り口から溢れる内臓

それは突如として爆破し、周辺に飛び散った。

目の前で破裂した人間を相手にどう思う？
いや、なんとも思わんか。

なんか今日はもう満足だ。

シアハ回収して寝よう。

第4話 白夜さんは静かに暮らしたい 3

一夜明けた今日

街は修復工事に明け暮れ、各地に警備の兵が歩き回っている。

・・・・取り敢えず情報がほしい。

どこかに図書館はないだろうか

服は奪つておいたのあるから良いとして、金は・・まあまたシアハぶん投げて荒らせば良いか、てゆーか魔王城の金庫にアホみたいにあつたし戦後ドイツ見たく札束風呂でようやくものかえるぐらいの物価じやなきや国家予算持つてるようなもんだしな。

良く考えれば資料はちゃんとしているのだろうか大方歴史改編されてそうだなあ。

まあ金属と魔法の概念の確認だけで良いか。

普通のレンガ造りの箱？

まあ要塞都市なだけあつてどこもかしこも似たようなものになつてるから分かりづれえ。

ここが図書館というか資料庫らしい。

・・・静かだ。

いやおかしいだろ、誰もいねえ。

まあええか、じゃあ全部死ぬまで借りましょ♪

えーと大陸とかの地図だろ、金属というか鉱石だろ、魔法関連だろ。ん？ 妖精？ ファンタジーだなあ、姉さん好きそうだし瓶詰めした妖精とかあつたら良いかな？ 借りよ

・・・対消滅魔法

対消滅エンジン

ネオグラ

これは借りねば。

ん？ 薬草図鑑か、これも良いな借りよ。

軍需系はないかあ。

まあ、今日はこれでいいだろ。

無人の倉庫を空き巣した後ドアノブを一応爆弾に変化させておき
すぐにつくさと街に溶け込む。

聞く話はどれもこれもちんけなものだ。

いや、魔王と勇者が相討ちしたという噂は広がっているのか。
近々王国首都から三千人で無人の魔王城視察とは。

そういえば国とか大陸が良くわからんな、ここどこだ。

魔王城近場の要塞都市としかきいてねえ

そういうや税金回収の役所は爆破しておくか、変に調べられても面倒
だしなうん。皆殺しだ資料もすべて爆破しよう。

大通りをまっすぐ進んで中央部のひときわ大きい建造物。
確かこれ、うん。

裏からはいる扉のドアノブを爆発し、鍵を強引に開ける。
すぐに腕だけ突つ込んでシアーハートアタックを射出。

後は冷えた紅茶でも飲みながら待てば処分完了ですはい。

裏扉のある方の煉瓦を爆弾に変換しすぐに退散して正面玄関に向
かう。

ああゝ爆発する音おゝ

悲鳴と同時に逃げ惑う職員や街の人たち。

いやゝ実に愉快だね。

せつかくあの地獄を潜り抜けたのに今度は自分達のいるところが
地獄の中心なのだから。

とはいえ今回は対応が早いな。

街の衛兵の他にちょっと奇抜な連中、まああれも冒険者というか勇
者と同じタイプの連中なのだろう。

だがな、シアーハートアタックは無敵だ。

貴様らのようなやつらに何が
何が

出来ちゃうかも。

やべえ、どうしよ、変に重力魔法とかやられたらどうしよ。

キラーコインの射程なんてたかが知れてるぞ。

直後一際大きな爆発が起こり、爆風が一部の壁は吹き飛んだ。

天は味方しているよ

空いた壁の穴からあいつらが見える。

明後日の方に向に斬り続ける剣士、無意味に広範囲を電撃で凧ぎ払う魔法使い二人いやー愉快愉快。

だが満身はせんよ。

袋から一枚の金貨を爆弾に変化させ、キラクイに持たせる。

こんな人混みからコイン一枚飛んできたところで確認できるか。

弾き飛ばされたコインは魔法使いの一人に触れ、魔法使いは膨れ上がりつて爆破した。

勿論行動を止めた剣士はシアハにもう一人の魔法使いはもうひとつ

のコインで爆破。

こつちに向かつてくるシアハ。

声は聞こえるため住人や衛兵はすぐさま反対方向に向かつて走り出した。

あ、やべつ、人混みの中央だからながされつ

あかんつ

邪魔だ!!

爆弾にした石ころを投げ捨て爆破させる。

自分はキラクイでガードするけど回りは普通に破片とかを食らつて重傷者多数。

右往左往する人間を抜けながらゆっくり裏扉へ移動する。

裏扉にはなにやら血飛沫があつた。

あの短時間でか

すぐに倉庫まで走り、書類を調べる。

重要そうなものは全部回収し残りは全部爆破!!

適当に松明を投げ捨て邪魔なのも全部焼き払う。

戻ってきたシアハをつかんで燃えているところへ投げつけては爆破して回収しすぐにまた別のところに投げつける。

あらかたの書類を排除した後開いた穴からこつそり抜け出す。
隣をすり抜けていく無数の衛兵。

もうなにもないと言うのになあ。

取り敢えずこれで数日はぐつすりと眠れる。

第⑤話　這い寄る爆弾

わしの朝は早い

朝日が登り、人々が街を動く前に起き
部屋で数分の読書をする。

読むものはそう決めてはなく

ある日は鉱物

ある日は魔術

ある日は料理とバラバラだ。

そしてある程度本を読んでいると

街が活気づき始め、情報収集の時間だ。

良くいる平民の装いをし足音を立てずゆっくりと街を散策する。

・・・あれ。

なんか今日は看板に人が多いな。

「・・・魔王軍残党討伐隊の一部隊が一夜で全滅・・・か」

確かに一部隊2000人を1000部隊用意した連合軍だろ、大方こういうのはドラゴンの群れみたいなやべえやつか残りの四天王なんだろうな。

・・・見えん、下の方が見えんな。

・・・なんだ、国家同士の報酬決めがうまくいかなかつただけか。

「・・・なんかこゝら辺ばっかりだな」

どの事件の発生もここからそう遠くないのがなんかきな臭いな。
くだらなくなり人混みに紛れながら帰ろうとしたとき、一瞬だけ変な気配を感じ、石ころを一つだけポケットの中で爆弾にし、隠し持つた。

少しだけ感じた視線は何故か無くなり

空からは

人間の死体が降ってきた。

最悪だ。

私の平穀を脅かす敵だ。

急な出来事に動搖を隠せない住民、響き渡る鐘の音。

最悪でしかない。

静かに、冷静に。

殺し方を考えよう。

いつもの事ではないか

平穏を乱し、不干涉を構えたこちらにこうさせる輩は。

ああ、だから殺そう

無惨にいこうか

綺麗にいこうか

派手にいこうか

冷酷にいこうか

壁に向かつて足を進める。

今回は確實に始末する。

いや、消し飛ばそう

石造りの階段を降り

そつと煙が昇っている所に爆弾にした石ころを投げ飛ばす。

そして手頃な石煉瓦を足元に置き

爆弾に変えては投擲と爆破を繰り返す

威力に関してはもう最大出力だ、人も魔物も関係ない

ついでにシアハも投擲。

投擲から大体二十分

爆発音以外聞こえなくなつた。

おかしいな。

『シアーハートアタック』の爆発音もない。

だがダメージを受けた感じもしない。

それに帰つても来ない。

ここから考えられる答えはいくつかある。

まずは糸かなんかで無理矢理シアハを固めた。

これならダメージは来ないし動きも爆発もしない。

二つ目はそこら辺に転がっているであろう松明に触れては爆発を繰り返して森とか川に勝手にいった。

爆発音だつてどこまでも聞こえるわけではない、遠くへいけば聞こえもしないさ。

三つ目はやめたいものだが

他にもスタンド使いがいてシアハが吹つ飛ばされたり永遠と熱源探ししたり、鏡の世界に没シユートされたりだ。

正直、俺自身、頭の片隅ではこれもあり得ると思つてはいた。

あの席が空いているからつて神になるつて言い出してなりかねない姉のことだ。

どつかで一人勝手に落ちて一人勝手に世界荒らし回つて一人勝手に愉悦してるやつだ。

どうせ当たり屋して矢と弓ぐらい持つている可能性もある。

姉さんは始めつから人類とか世界とか名誉なんて興味ないし、女の幸せなんて糞食らえつて言いながら人を踏みにじるやつだ、どうせこの世界に飽きてスタンド使い量産して好き放題するなんて普通だ。まあ、人間なんて所詮その程度だし、しようがないか。

まあ考へてもしようがないか

座つていた椅子から立ち、証拠も消す。

・・・静かだ。

この静けさが良かつた。

あの馬鹿やつてるのも良かつたがやっぱり、ここだな。

臭いは別に無い。

穴ぼこだらけだな

死体はまあ、うん、綺麗に吹つ飛んでるな

あ、シアハ埋まつてた・・・。

「・・・姉さんの手口じゃないなこれ」

杭で潰して泥で埋めて・・・氷の魔術で固めて・・・硬化してやがる。

シアーハートアタックは熱源に突つ込むことしかできないからつて熱源奪うつて・・・シアハの前にキャンプファイヤーの跡もあるし

明らかに知ってるやつだ。

だけど姉さんならこんなまどろっこしい事はしない。

ハンドなら数百メートル程度空間削つて吹っ飛ばしたり、世界で離れるぐらいできる。

いやだなあ。

つまり「同じようなやつ」が居るってことじやん、俺や姉さんと同じ、神に転生させてもらってチート使つてる奴だな、でなきやシアハなんて対応できねえよ。

それか姉さんの差し金、まあ、どっちにしても平穏が乱されるな。殺すか

かつてええ!!

三分後

つたく、手間かけさせんな、こちとら魔術なんて夢のある物には全く手を付けてなかつたんだぞ。

つたく、しようがない。

ん?

「コップ? まじでキャンプしてたのか、ここ有名な要塞都市らしいけどなんで野宿なんだよ」

・・・あれ。

襲撃地点はここだよな

こいつらはここでキャンプ

門も少し遠いし

・・・殺しに来てたのか?

何か嫌な予感がするな

なんか抜けてるような

(；・ω・)

まあ、下手に動くのも不味いし一回帰るか。

日が落ち月が上りきつた真夜中。

「(ノ・ω・)ノ」ポイ

魔術書つてさ、なんかこうS A Nが削られるようなものやとおもう

やん

辞書みたいなのが読んでるみたいなもんなんだよね。

・・・どれもこれも最高ランクの術式か。

決まつたな。

たまには、本気の殺しつてのも楽しんでみようじゃないか。
寝てたいし

VI話 天元の魔術師

いつものように朝は来る。

これは覆しようがない事実だ。

今日の朝食はシチューだ。

別に深い意味はない

ただ、いつも通りと言うわけにもいかない。

私の平穏を乱す敵は

確実に始末しなくてはならないからだ。

さあ、今日も頑張ろう。

扉を開け、朝の世界を静かに、冷酷にゆっくりと歩く。

大道りに人が多いな・・・。

「・・・たいした人望だな」

街の住人の大半は居るな。

とりあえず爆弾に変えた石ころでも投げ捨てておくか。

「・・・遅いなあ」

十分は待つてゐんじやが、亀なの、牛なの、のろまなの？

そうやつてのんびり金貨を一、二枚刷りながらのんびりと眺めていふと少し違和感を感じた。

いや、感じざるおえない。

こんな長い時間待つてゐるのになぜ『一人も』去ろうとしない。

どう考えたつていつ来るかわからない現状、一旦家に帰るのも考え付くだろ。

それに金貨を刷つてゐるときなぜかたまにナイフがある辺りおかしい。

よく見ると男どもの目には殺氣すら宿つている。

まさかな。

どれだけ敵を作つてやがるんだよ

数は20かそこら、こんなちよつとした通りだけでこんにいるか普通。

聞いてみるか・・・。

腰にナイフを少し見えるように隠し、そつと男の近くに歩き、横にたつ。

「すいません、自分ここを通る人を待つているのですがいつ来るか知っていますか?」

「サアな、そのブツを見る限りお前も俺らと同じ奴だろ」

どうやら結構ヘイトは高いらしい、ただの老人みたいな落ちではないよねうん。

「いえ、確かに依頼はされたのですがどんな人物なのかは聞いていいので」

「ああ、そりやオメエ、『天元の魔術師』だもんな、一流の暗殺者だつてその名を聞くだけで逃げ出してしまうぐらい有名なヤツだからな、大方なにも知らない新人を使つた鉄砲玉か・・・」

ふーん、本格的にやべえやつか。

「これから始めるわけですが何かすごい逸話もあるのでしょうか?」

「そりゃあもちろん、何がすごいつて全ての魔法を無詠唱で乱射できる上に魔力が無尽蔵だからな、それいがいにも一緒にいる巫女服の女は目をつぶっているだけは五秒先の未来を見続けるときた、他にも最上位のやつらもわんさかいてそりゃあ殺りづらいが、やつちまえぱ一発でこの暗殺世界の英雄だ」

「・・・英雄」

こいつ二流だな。

普通ならこんなクソゲーやらねえよ。

「ほお、気押されているな、まあ、始めの殺しがこれだからな、しつかりやれよ、まあ俺も狙つているんだがな、この相手ばかりは手を組んでやるしかねえよ」

いやいやいや、未来視持ちと詠唱ゼロはあかんつて……まあ、平穏を乱す敵になりうる存在ではあるな。

「は、はは……そんなすごい人が……」

「それとこの世界に入りたての坊主に言つておくとな、ナイフは服の裏側や袖に巻き付けて隠せそれと黒く塗つて光を反射させるな、それじやあ光つてばれるぞ」

この雑さには気づくのか、ますます二流で確定だな。
名誉ほしさにこれはねえな。

「あつ……そうですね」

すぐにナイフを引き抜きやすい所に隠し本題にはいる。

「実は遠い田舎から来たので知らないのですがその人はどんなことをしてこれほどまでに狙われることを」

「坊主、観察眼は優れているな、ここにいる暗殺者を見つけたな。それでなぜか、かあ、あの男はな、ここら辺の国に急に出てきてその圧倒的な力で数々の闇の取引相手を潰し回つて資金援助してくれた死の商人や麻薬、奴隸売買を潰し回つたからなあ、それどころかこの国王を説得して奴隸制度を廃止ときた、こつちからすりや稼ぎも労働力も無くなつて止めて欲しいのにあの糞野郎王の娘と結婚を取り付けそつからさらに俺らを潰すために国境全てに門を敷いて法外な税金とつていこうとするんだ、だから俺らは全員で結託してあの男を殺さなくちゃならない」

うわあ、えつぐい。

まあ、どうでもいいか。

そういう語り合つていると少し遠くで大きな物音が聞こえ
人間が飛んできた。

210はある大男だ。

ああ、きたのか。

黒い髪

白を主体としたどこの国とも取れない服
そこに刃物を突き立てようとする男達。

その鋭い刃は喉を裂くことなく、ただ、空中に浮かべあげられる
のみ。

確かに強者だ。

だが、臭いは感じない

ただ強いだけの獣だ

あれは強者ではない。

隣にいるずっと目を瞑つて石ころ一つつかない巫女服の銀髪の女
の方が恐い。

まるで殺人鬼の目だ

視線はないが気配は感じる。

明らかに感知されている。

「その首貫つたアツ!!」

「・・・バカなヤツだ」

間合いに入つた男にナイフを投げ、魔術だろうか、一瞬で天高く打ち上げられたナイフを無視し人をすり抜けて魔術師にナイフを突き立てた男。

結果だけ言うなら無惨なものだ。

打ち上げられたナイフは一瞬固定されたと思えば高速で男の頭と心臓と両足首を貫通しそのまま焼かれた。

視覚外からの攻撃を無理と知るや否やこれが。

まあいい、本当に恐いのは巫女の方だ

本当に未来が見えているなら俺の置いた爆弾を警戒するはず。

さあ、どう出る、ここはもうキラーケイーンの射程圏内だ。

「・・・!?

巫女が魔術師にの耳元で何かを訴えた瞬間、周辺に光が放たれ、視界が潰される。

やはり見えていた!!

俺は確かにあの勇者が後数秒歩けば爆風で始末できると思つた距離でこれだ、あの女見えている。

光が沈む頃には

もう、無数の暗殺者達の死体と観客しかいなかつた。

第7話 十秒前の死

さてどうしたものか。

人の居なくなつた街道

ただ一人この惨状を見ているだけだが。
冷静に不味い。

まじの未来視はあかんつて。

まあ、確かに五秒先だつたけどさ。

これがなあ、ただの奴なら回避不能の攻撃でケリをつけれるが
なあ。

パーぺキだわこりや。

なーんて

普通は思つてるんじやろうな。

大方あの魔術師は転生者、でなきやあそこまでシアハを無力化何て
できるわけがない。

あつちも警戒してるだろーしなー

面制圧射撃も罠も近接戦闘もぜーんぶ無理。
はあーくつそ

でも、抜け道がないわけではない。

どうせずっと巫女と同じところで行動するならこつちに手段があ
る。

どんな攻撃も防ぎどんな死すら回避する。

だがそれは五秒先での未来だ。

ならば

五秒以上先で死が確定する運命に固定させればいい。

知つたときには死

それ以外、純粹にやつて勝ち目は無からう。

・・・・・ん

ちよい待て

よく考えたら未来視つてなんだ

・・もし、姉さんの粉かけだつたら
来た方角は一緒だ

あり得ないわけがない

もしそうなら、あの巫女相当難敵だぞ。

・・・仕方がない、情報なしではやつてられんか。

とはいえ、ああも内部に籠られると並の方法じやいけねよ。
地下水路から隠し通路を通つて直接やりあつてみるか。

秘策とはいえんが、一応の手段もあるしな。

今大体8時だろうか

月がのぼり、中央通りの活気が少し残つてゐる今、やつてみるしか
ない。

街一番の石橋の下にある鉄格子の錠を爆破しゆつくりと開けて中
に入る。

この要塞はそもそも地上と地下両方のインフラが整つてゐるから
防衛戦においても強かつたというのにこの捨てられ様、いざれ隠し通
路を通つて来る進行も・・・

なんだこの青白い結晶・・・
メモにあつたかな

ああこれ、結界

うそやん

できて新しいし、これ最高ランクのやつんやん、あの魔術師もうか。
とはいえ、物質ならば無駄なことだ。

「・・・・ああ」

そういうことか

そりやそうだ

とはいえ、確認はいるな。

結晶に耳をあて、呼吸を落ち着かせる。

呼吸は12

鼓動は12

いるな

私にこんな精密さがあるだろうか。

スタンドは使用者の精神に寄りかかっているという、不安だな。

「・・・」

そつと始めるために目を下ろすと運は味方した
ネズミだ

この結界を迂回しようと細い土壁を掘つているねずみではないか。
ああ、これなら未来が見えていようが爆風に巻き込める

ねずみを爆弾にし、全力でこの結晶を殴る
全力のラツシユではあるが狙いは正確に

張らす筋は計画的に

壊しきらない程度に

ねずみが隅の方の小さな小さな亀裂からねずみの出るであろう穴
を確認する。

さあ一発勝負だ

転生者

ねずみが穴を開け奥へ走り込むと同時に

「点火!!」

一瞬何かが跳んで逃げたがもう遅い

同時にスイッチを押し、爆発したねずみの爆風の方が早い!!

「うわああああ」「何が起こつた!! 報告いそげっ」

そして、綺麗にヒビを入れた結晶の一つを爆弾に変化させ、点火
こちらにもほんの少し爆風は来るが問題はない、だが、
ダイヤモンドみたいにしたこの結晶爆弾の向こうには
無数のヒビが爆風とあいまつて延びきり弾け、それはちょっとした
散弾になるであろう。

所詮は真似事だがな。

反応はない

呼吸も感じない

ああそうか、一撃で頭を撃ち抜いたか。

おつそろしいものだよ、即死するほど固いのか
穴だらけの無数の出来立て死体と……。

「そこのフード男!!顔を見せてみろ!」

無数の魔方陣の向こうからこちらを見据える二人。

射程距離外だが

無理か。

「…すまないな、貴様は私の平穏を乱す敵になるかもしないのだ、
だがな、聞かせろ」

こつからは賭けだな…シアハがうまく動いてくれよ
「それはこつちの台詞だ、お前も俺と同じ転生者か」

「そうだ」

何を怯えている?

震えが止まつてない

まさかな

「貴様、俺と同じような奴に会つたのか」

拳を握つた…やつぱりかあ

「ああ、助けてくれよ!!あの白髪の長髪女、『世界』で…俺の…
俺の仲間を全員殺して…あんなの人のやることじゃねえ!!」

「ユウキ様!!」

・・・姉さん

さいつこうに遊んでるな

「…そうか、だが貴様ほどの者だ、なぜ勝てなかつた、所詮は敵も
人間、たかが知れてただろ」

「ああ、そうだよ、行けると思つていた…だがどうだ、あいつは…:
11秒、13秒と少しづつ少しづつ…時間を伸ばしていった」
うそだろおい

「貴様はせいぜい9秒だつたのか」

「そこからは地獄だつた、一人、また一人心臓を抜かれた後にミンチになるまで殴り飛ばして……俺はこいつだけでも連れて逃げてきた……いや、生かされた、ある男を探せと……」

「……ん？あの巫女、なぜ金色のオーラ……未来予知だからキンクリ……いやまさかめんどくさい者を

「ええ、ここまで長旅ご苦労様、この体は不便ね、捨てよ」

「こつちに……い」

言いきる一瞬

体が硬直したように重くなり

世界が変わつた

貫かれた胴体

碎かれていた魔方陣

気がついたら俺はこいつの近くにいた

この吐き気を催す邪悪な姉に

「……人の体を使つて来るとはまあ……大方、十秒かそこらは止めたか……」

「ええ、ちょーと、悪魔との契約でね……確かに朝のこの娘は本人、でも……これは知らなかつたのよねえ」

そういい、背中を見せる。

そこには小さな本当に3カラットダイヤでしかない宝石が埋め込まれていた。

「……ちよつ、まつ、やめつ、キラークイーンはだめつ、しぬつ」

「……姉さん、神からかつぱらつた物つてスタンドだけじやないよね♪」

「イヤー、ソノー、キラークイーンでカタポンはソノーええ、貴方が爆殺前にもうちよつと持ち越ししたけどそれ以外は違うわよ天国に至つて手にいれたものよ」

あ、これE.O.Hだ。

「だつてだつてだつて、せつかく空いた空席、奪わない手がないじゃない、数百万を軽く殺せるのよ、欲しいに決まっているじゃない、白も欲しいでしょ」

そーゆうとこだぞ姉さん

「ハア……そりやあ、姉さんが居なきや人類なんて消してもいいと思うよ、さつさと滅ぼしてもいいと思うよ、軽く消せるなら効率いいし殺るよ、でもさ、もうしがらみもないんだ、だから……さ」どうしよう、あまりにもあつけなく幕切れしたからなんもいえねえ。

まあ、うん。しようがないか。

・・・是非もなし

「ねえ、覚えてる？昔、二人でこんなことやつたの」

「ええ、あの時は結構ハイテンションだったわね、白」

背を向け、そつと足を進める。

「精々、頑張るといいさ……俺はもう、俺でしかないんだ」

世界なんてどうでもいい

他者なんて興味ない

目的は遂行した

なればもう平穀以外はいらない

狂帝なんてもううんざりだ。

俺は名は捨てただけの男でいい

もう、この世界に来た時点で俺は刃を落とした

もう、誰も望まないでくれ

くだらねえ野心燃やして来ないでくれ
光と影を見せないでくれ

また、面白くなつてはじめたくなるじやねえか

ああそうだよ

まだ、血を流し足りないのか？

まだ不幸が足りないのか

まだ栄光を望むのか
なら代償を示せ

犠牲を作れ

俺が叶えよう

空っぽの器が叶えよう
どんなどす黒い願いも
どんな純白な戯れ言も
刃は落ちた

だが誰も

使い手が死んだとも

刀身がへし折れたとも言つてはいない。
ただ休むだけかもしけない
いいじやないかそういうの

楽しそうだ

俺は生憎、仙人みたいな生き方は御免だ

何も縛るものがない

だがそれは同時につまらなさも感じるな
自由ではあるが不自由だ
また、気分で動こう。

・・・・・

目的は決まつたが腹が減つたな。
適当に店いくか。

第8話 魔女？魔法少女？いえ、魔女つ子です

静かな世界

ただ木々が立ち並ぶだけの世界
こんな無意味なところになぜ来る必要があったのだろうか。
どれもこれもアイツだ

あの姉さえ

邪魔しなければ

のんびり寝てるだけで落ち着けるのに

ああ、憎らしい

あやちつち

(・。ω・)

そういうや、あいつのくれたゲーム溶かしきつてなかつたな

あやちつち

あやちつち

(・。ω・)

やつぱありやねえよなあ

(・。ω・)

「つぶはつ」

長い

黒い森を歩き始めてはや十分

結構早いつもりだつたが

不思議なものだな

まあ、もう目視で見えるところだし、別にいいか。

「・・・留守か？人気がしない」
燃やしとくか。

いや、ドアノブでも爆弾にするか。

また明日か。

翌日

「爆破跡……でも薪が新しいし死んでないか」
そつとドアを爆弾に今日も帰るか。

翌日

「……うわー、窓が木つ端微塵、触れやがったな」

それでもなんか、本が置かれてるし生きてるんだろう。
今日もドア前の石ころを爆弾に変えて帰る。

翌日

「……」

地面が抉れてる……

帰るか

「オイコラ」

?

「……氣のせいか」

明らかに上から聞こえたけど聞こえないフリしどこ

「毎日毎日、なんか、来たら帰つてそのあとになんか爆発もして、あの
男といいなにさ、異世界人は自分勝手なの？」

・・俺じやない、あいつらのことだろ

「帰るか」

目的なんて忘れたけどいいや

「・・・もう許せない、あんた・・・・・」

もう、キラーキーンの能力で爆弾になつてゐるんだよな、そんなんち
んたら詠唱されましても

「・・・・・」（無言の点火）

あ、やべ。

思い出した

聞きたいことあつたんだ

「・・・・・首しかねえな・・・・」

「生きてるわよ」

・・・・・まじかあ

「じゃあ話でもしようか、お嬢さん」

「・・・・・吐き気がするわ、その眼」

「それはどうも、たしか、賢者なんだつて？キミ」

「ええ、私はこの大陸二番手の賢人 r 「覚える氣無いから」・・・・

さて、何を聞きたかつたつけ

「・・・アンタ、災難だつたね」

「・・・読心系の魔術の発展か？それとも変異か」

「これは変異種よ、これのせいで若い頃はひどい目にあつたわ、で、
ああ、他の転生者と天元の魔術師ね・・・・」

わーはなしはやい

「ええ、まずは彼ね、あの男は貴方より前に来た転生者、持つてきた能
力は『無限魔力』『才能値限界無し』まさに元凡人がへんに夢見たもの
ね、とはいえ所詮平和な世界にしか居なかつた凡人、無駄な優しさや
下らない顯示欲にまみれてか・・・ええ、彼に魔術を教えたのは私
・・・・どこまで見ていて

「前世含めざつと三億年」

「覗くな」

「勝手に爆弾置くのもどうかと思うわ」
人前で再生するやつがあるか。

まあ、やつたの俺だけど。

「そうね、じゃあ次、他の転生者ね、私が知りうる限りだとざつと10人、とはいえ、システムからしてもつといいるわね」

システム？

ああ、他の神がいて別の世界から呼んでるのか。
馬鹿なのだろうか、そんなことしたらいつか

「もう、現在進行形で会つてるわよ」

「そうなん」

「ええ、少し前にあなたが爆破した魔王は元転生者、はじめは正義感だらけだつたけど、死への恐怖からかしら、それから魔王のガワを使って魔王になつて人類を滅ぼし始めたわ」

「そうか、いやだなあ、転生者祭りとか、とりあえず全裸じや寒いだろ、家はいるか」

「爆破したの貴方ですよね」

マントを彼女に与えたあと、ボロボロの家の扉を蹴り飛ばした。

「ちよつ」

第9話 賢者Rさん

家のなかは特に荒れているわけでもなく、落ち着いた感じであつた。

壁が全部本なのはどうなのだろうか。

「随分と集めているのだな」

形や色こそ理解できないがどれもこれも魔術の道具なのは分かる。だが理解できんな。

どこにも大量破壊兵器がない。

「……さて、他にはなにがあるかい？」

聞いていいのだろうか

いや聞くか爆弾にしたし

「いい紅茶だな、どこのやつだ？」

「あ、それは裏庭で栽培した自作の葉っぱだよ、そつちの世界じゃ存在しない品種さ」

通りでクツソ甘いわけだ

これ紅茶ではあるけど角砂糖入れまくつた感じなんだよなあ。

「そうがあ、じゃあ帰るか」

「えつ？」

？

「用件すんだはずだし帰るんだけど」

「……君だつて一人の男だろう、こう、なんだ、ないのか」

「殺意しかないが？」

「……私、何かしたかしら、むしろやられた方だとおもうのだけど」

「いや、俺、昔色々合つて殺意以外の感情がわかなくなつてきた……ゆーかうん、もともとストレス貯めたくないから殺意に変換してたけどあの糞姉のせいでストレスマツハなんだよ、帰らせろ、死にてえのか、バラすぞてめえ」

「なにこの豹変ぶり」

「いいからさつさと用件言え、帰つて寝たい」

「君の姉のことさ」

場合によつちや始末しないとな。

「ああ、そうか、なら聞こうか、なあ、賢人、いや魔女かな？」

「そんな呼び方は正直どうでもいいさ、好きで賢人名乗つてたるだけで実際やつてることは魔女だしね、それでだ、君の姉のことだが、正直、この世界になんの恨みがあつてあんなことをする」

「知らんな、俺も姉さんも人間は好感持てないからな、気分で殺し回つてるのでは」

「・・・ただの人間嫌いが魔王軍の幹部と契約して、そこら辺の人間を怪物に変えて転生者をそそのかして殺しあいをさせるのか？」

あ、なんか読めた。

「なあ、急いで止めないと取り返しのつかないことになるぞそれ」「知つても止めないのかい？」

当然の質問に答える必要もないだろう

「そうかい、君も傍観者か」

「今は本気で邪魔する気もないしな」

ドアを開け、空を見上げる、空はもう暗くなつていた
「・・・」

確かに一步進んだはず、だが、現実は違つた
ドアはしまり、手はドアノブを握つていた。
自分の服を爆弾の変え

もう一度ドアを開け、進む。

・・・

ありのままに起こつたことを話す必要もないか

「え？どうして・・・」

「なあ、お前さ、前に姉さんに会つたろ」

「確かに先週・・・訪れて來たわ」

静かに

冷たく

恐怖は

変わる。

「伏せろ、死ぬぜ。これ」

彼女の頭を無理矢理床に叩きつけ直ぐに自分も姿勢を下げる。

直後、三十本ぐらいのナイフがドアや窓を貫通しそのまま反対側に突き抜け、遅れて一本の太刀が飛んできた。

それは一瞬だろうか

まばたきするほどの一瞬

もし、これが本当に一瞬だつたら死んでいたのだろう。

黒い影が人になり

無数の斬撃が部屋を無差別に破壊した

ボクサーとは、殴られる一瞬、世界がスローモーションで動いてい

るとよく言う。

だがそれは結局のところ

ただの集中力なのだろう。

「あつぶねえ、見切れてなかつたら死んでたな、本氣で殺すことは無い
んじやないのか？俺は怪物は嫌だぞ、美がないじゃないか」

「地獄つてさ、遠くて近かつたよ、白夜……ねえ」

黒い羽織

銀のイヤリング

金細工のされている白い鎧

金髪のポニテ

誰？

「・・・あ、やつべ、こいつ・・・ミンチよりひでえ」

避けられなきや内蔵ぶちまけてそこらじゅうに四肢をとばされてつたかあ。

「・・・おーいもしもーし、きいてるう？」

「邪魔するなら帰つて、俺はもうのんびりしたいんだよ、また気が乗つたらでいいでしょ」

「・・・とりあえず世界中の宝剣とか全部置いておくから隠しといて」

どおしよ、再生遅い

「別にいけど、何かあつた？大方空いた空席座つてやりたい放題した
ら周りから刺されたんだどうけどさ」

「正解、ちょっと世界作り直そと遊んだらこの世界の他の神に目を
つけられたからちょっと全面戦争していくる」

「あつそ、こつちに迷惑かけるなよ」

散らばっていたエリクサーを箱に詰め、飛び散った肉片を瓶に詰める。

その頃にはもう、姉の姿もなく、置いてあつたのは一つの銀の指輪。外にある荷車にかろうじて残っている本や石も詰め込み家に火を放つ。

「つちよ、私の家が」

「流石に変に対抗策を練られても困るしな、焼かせてもらつたよ」

静かな黒い森をゆつくりと、進む

月は雲に隠れ

今歩いている一本の道以外にもう、なにもない。

「・・・逃げたら駄目なようね」

「敵を知つてゐる貴様が逃げるものか」

森を半分くらいだろうか、進み続けるとそこからは血生臭さと肉片が砂と混じり、遠くの村があるはずの所には煙が上つていた。

「あそここの衛兵か・・・」

「・・・何よ、これ、傷がおかしいわ」

刃の刺さり方からして農具なのだろう。

愉快なことになつてきたな

「複数人の農民に心臓や首を抉られているな、ここら辺はなんか恨みを変われるようなことをしたのか？」

「そんなはずないわよ、國民にも慕われてゐるし軍だつてそんじよそこの國とは違つて精銳揃いよ・・・貴方とかあの女がイカれているだけで普通は余程の魔術がないと倒すのは無理よ」

まあ、そうだよな、完全に読めた。

あの人本気だ
やつぱいいねえ

「ならば、貴様はずつと俺の横にいろ、命の保証はする、姉さんえげつないからさ」

「楽しそうね」

新聞つてあるのかな

「そういえばさ、名前、なんて言うんだ、お嬢さん」

「リリム・シェール・マーキュリー……昔の捨てた名前よ」

「そうか、なら、こっちも名乗つておくか……」

忘れた

どうしよ

姓名とか全然使わねえよ

てか

うんいいや

「忘れた、まあいいや、宮木 白夜。捨てた名前につけた新しい名前
さ……」

ぼろぼろの城塞を眺めつつ、ゆっくりと、気楽に
もう堪えられないかもしけない
この狂つた盤面を早くみたい
あと何億人死ぬのだ
楽しみは取りたくないものだな。

第10話　日常

日が登りだし、街が修復のために活氣づき始めたこのころ。暖かな光は全てを包み込んでくれるが

同時に、どうしようもない闇も蔓延つてゐるらしい。

「……これで良いか、曲は……何でも良いか」

一枚の楽譜を箱に入れネジを回しゆつくりと離す。

朝はやつぱり洋学でも流しながら窓から差し込む程度の光の中の暗い部屋ですごすのがいいね。

人は怪物を生み出し

怪物は敵に牙を向き

ならばどうする

「暗い」

「うつせえ、適当に魔法使つて自分の視界だけ明るくしどけ」

このちつちやくないチビスケ同居人。

肝が座つて いるというかなんとか。

「んう・・・・あれ、なに作つてるのさ」

「これからお前かそこの宝剣目当てに神託受けた敵が来るだろうからな、平穀を犯すのであれば始末しなくてはならないさ」

「私は無価値かい」

「テーマを爆弾にして簞巻きにして街に捨ててやろうか？」

「死んじやう、それ私絶対死ぬよねそれ」

ナイフをポケットにしまい適当に袋から金貨を取り出す。

正直、ハッタリなんて効かないだろうが

「ほれ、これでなんか買つてこい、俺はここで待つとくからさ」「ちよつと、いや、私一応敵なのだけど」

「早く帰らんと死ぬだけだろうが……まあ、運良く見つかるといな」

大体三日分の食料は用意できる金貨の袋を投げ、すぐに作業台の箱に手を伸ばす。

「……なにつくつてんのさそれ」

「ストキヤ」

「・・・ふーん、じゃあ、行つてくるよ」

「はよいけ、ここらへん人のがわ被つたバケモノだらけだ、正直反吐ができる、幹部が来るまで掃除でもしておいてくれ」

「はいはい」

扉がしまり人がいなくなつた部屋

とりあえず箱の中に宝石とちょっとした魔方陣を書き固定する。

仕組みは至つて簡単

魔法は魔力のパスさえあれば魔方陣を使つてファンネルみたいな運用もできる。

なら空気を物質までとはいかないが風船みたいに塊にすればいいだけ。

まあ、ただ猫草を魔法で応用してやるだけ。

「よし、入つたな・・・動きよし、出し入れよし」

問題は自動防御してくれないんだよな

空気弾強いけど千里眼と併用する頭痛くなるし、スタンド使い相手だとまず対処法知られてるだろうしなあ。

矢は死にかねないし、まずレクイエムできるかもわからん。

念には念というが、苦労はいつまでたつても絶えないものだ。

「・・・ぽい」

なんとなく空気弾を爆弾にしゆつくりと街の時計に持つていく。ふよふよとどんでいった爆弾は時計のはりに触れて爆発しそのまま霧散した。

・・・そういえば、まだだつたな朝食。

「・・・パンと卵とベーコンだな」

さてと、どうしたことか。

昔からどうしてもあるの感じは嫌いだつた
正直、こんな面倒事引き受けるべきじやなかつた。

別に抑える必要がないつてのはむしろ虚無を与えるものとはな。
だめだ、頭が回らん、さつさと来ないかな。

「・・・・はあ」

ついさつきおいたはずの朝食が消えてる

「やっぱ考え方しながらだとダメだな」

食器を片付けもう一食分作り直す。

日常とは常に退屈なものだ。

いやちがうな

面倒事に巻き込まれて殺しができないからか

また、考えないとな。

「ただいま」

「随分と早いな、なにかあつたのか」

「外ではすごい大規模な戦争が起こってるんだって、もう小国はいくつか滅んでいるらしいし」

どつちが勝つても駄目じやねえか。

「そうか、で、外はどうだった」

「なんか魔王軍の幹部クラスが数人紛れ込んでたよ、ここは安全地帯
だけどある意味地獄ね」

「まあ、これからあの姉のことだ、周辺の村を全部焼いてここに人を集め
るんだろうな、ここが一番安全な理由なんて敵は計り様はないし」

別に目の前で虐殺なんてしなくとも良いんだけどなあ

「まあ、本格的な動きはこれからさ、ゆっくりと待つておけば良い
さ・・・待ちたくねえ」

いやだめだ、面白いとわかっているからこそ荒らしたい

(・・・)

日常とは

何をもつてしてそういうのだろうか。

答えにはまだ遠い

だが

足音は聞こえてくる

誰も逃げられない

弱者は必ず生き残れない地獄
全てに決着がつくのは
神知らないのだろう。

月紅 話21第

「♪♪」

筈で家の床を払いながら今日の献立を考える。

あのときなら絶対にできなかつた『干渉者』の居ない平穏。物足りないものは特になく、静かな世界。

ああ、もし言うならそうだな。

「びやあくうやあおしやけえ」

このクソザコさえ居なければ

とはいえ

こいつ、意外とぷにぷにしてるから暇潰しにはいいんだよな。

「つたく、外に出たら即狙撃されるわ、幹部クラスが殺しに来るわで辛いのはわかるけどよ、酒ばっかり飲むなよ・・・」

とつ散らかつた瓶は台所に置き、水洗いした後の乾かした瓶と交換する、交換した瓶は木箱につめて部屋のすみに置いておく。その後にタンスからビールを呑んだくれの前に置く。

「・・・ほら、今日は酒と夕食集めに行くから仕度しろよ」

「ふああい」

ダメだこいつ、はじめの方は行き悠悠と幹部どもをボコるために出でいったのにこれだ、いやまあ、うん。

まさか魔王軍の最高幹部とか姉さんの息のかかつたスタンド使いとか、謎の生命体とかまあうん、タイマンで勝てる敵じやがないな。まあ、不死身だろうがなんだろうがキラークイーンで魂ごと吹き飛ばして即死させられる辺り気にすることではないが、こいつは別だな。

実際今まで七回ぐらい勇者とか啓示受けたっぽい連中とか、国外の部隊が来てたが結果は広場でギロチン処刑。

この城塞都市の主はもう希望を捨てたのか動きもなし。はつきり言つてもう天下を取れている。

問題はあの姉が世界を支配するかつてこと。

そこだけが引っ掛かる。

ただ戦争をしたいだけでもない。

真意がわからない。

いや、なにかヒントを見落としているようなそんな感じで。

いや、おかしいな。

あれはただ楽しみたいだけ、なら縛られる立場なんて行かない。それでもそこにしかないもの。

『世界』

『増えるスタンド使い』

『神』

『天国』

「そうか、そうかそうか・・・・おい、マキ、重大な話があるんだが」「・・・すやあ」

だめだこれ。

「一步、いえ、一考かしら遅かったようね」

甘く醜い言葉がささやかれた瞬間すぐに自分を爆弾にして距離をとる。

そこいたのは

金のロングヘア

純白というよりは死体に近い白い肌

まるで壊れたレンズのようにも見える色々な色が混ざった瞳と左

目の銀の眼球

もうないか

「……どおした姉さん、ここは鏡の世界だろ、さつさと触れれば良いじやないか」

「自分を爆弾にしているでしょ、抜け目ない」

一步、後ろにろに下がり、鏡に触る。

腕は鏡を抜き元の世界へ繋がり続けていた。

「ねえ、もし、『効率的に虐殺できる』方法があつたら乗る?」

「乗らねえ」

乗れるわけもねえ

「なぜかしら」

思考を巡らせる

何を考えている

本当にそれだけか

「大方、しようもない方法でやるからだろうが、そこには美しさの欠片も感じねえ」

「そう、じやあ、いい加減こつちも面子の処理をしたいから、後はよろしく」

処理?

その言葉の意味はそれほど難しくはないが理由はわからなかつた。

純粹になぜ『処理』するのかが。

「あ、そうだ、これを刺すのが本題だつた」

直後時でも止まつたのか左肩から一本の矢が貫通した。

咄嗟に鏡から脱出し矢を抜き取ろうとろうと右腕で矢を掴み全力で引っ張る。

勿論抜けるわけもなく
意識は途絶えた。

理由がわからない
なぜ今になつてだ。

別にどうでもよかつた。
だが、そういう奴だつた。

次に意識が目覚めたのは紅い夜だつた。

月が紅く染まり、周囲は腐つた血の臭いが漂い、人も魔物も関係なくただ本能で殺しあいを続けていた。
世紀末を通り越してひでえなこれ

「・・・もういいか」

落ちていた矢を拾いマキの背中にぶつ刺す。
適当に棚から鍋を取り出し具材を揃える。

今さら世界がどうなろうが興味はない
どうせ世界を一巡させる事が目的なのだろう。

処理の理由もいたつて簡単

あれは簡単に言えば未来予知だ、全てに死の運命を告げるだけだろう。

そんなクレーマー処理をあの姉がしたがるわけもない、大方、神も何もかもを殺すなら世界そのものをおさめればいいと思つたのだろう。

くだらない

ただが数億の命になんの価値がある。

答えの無い問題は何の意味がある

時も場合も考えずただ問い合わせを出せばいいわけでもない。

答えに到達することは無いのかもしれない。
結果は常に選択したものに委ねられる
結果は結果ではなく過程の終着点だ

これは選定だ

ここから先、存在するものはない。

「ダメだなあ俺もお前も」

温まつたスープを一口だけ飲みすぐに蓋をして家を出る。
鍵は掛けておきそつと町を出る。

P V V O O D O O K I N G D O M

さあ、俺の『世界』は何をみた
これは『俺の正義』だ。

駄目な姉を持つと本当に苦労が絶えんよ。

だから
姉さんの幸せのために

キ

ヲ

シ

ミ

マ

サ

ツ

セ

テ

モ

ウ ラ

ヨ

A n o t h e r o n e
b i t e s

t h e

d u s t

私はずっと疎まれていた
私は逃げ続けた
でも、それじゃあどうしようもなかつた
だから、私は立ち向かう、『絶望』に

私はずっと疎まれていた
私は逃げ続けた
でも、それじゃあどうしようもなかつた
だから、私は立ち向かう、『絶望』に

「どおして……どおしてなの……白夜……どおして私には優しくしてくれないのよ……」

「フハハハハツツ……バイツアダストは作動した!!!!…だが、一手遅れたようだな……今この一瞬をもち、『世界』は『一巡』するつ!!」

「『世界』!! 時よ我が意に従え!!」

「さあ、最終ラウンドだ、一気にカタをつけるぞ!!」

「さあ!! 祝うがいいこれが新たなる『究極の生命』の誕生よお!!」

「ふふ、あははつ、私の負けね、でも、きつと……意思を継ぐのだろうなあ」

「これが真の私のスタンド……『メイド・イン・ヘブン』……」

「これが答えだマーキユリー」

「どこまでも非道で優しいのね」

「俺はあるの女を追い詰めた、追い詰めたはずなんだ!!なのになぜ、俺の方が追い詰められている!!」

「フツ・・・・簡単なことよ、ここが私の『世界』だからさ」

「私は世界のために戦っているわけではない……今それに気づいたの……」

「水星のように綺麗な貴女に送ろう、白き月の屋敷の元に赴くといいさすれば天国への門は開かれる」

「じゃあな、マーキュリー、本当に終了だ、俺はどうしても姉さんの味

方らしい……弟だからな、俺

「ほざけええ!!」

『キング・クリムゾン』!!

『スター・プラチナ・ザ・ワールド』!!

『パープル・ヘイズ』!!

「フハハハハ、これが過去に滅亡したという吸血鬼の力だ!」

「ははっ・・・そうか、良かつた」

『これが私の・・・スタンンド・・・・『C—MOON』』

貴様はこの私に何をみた

絶望か恐怖か狂信か

答える必要はない

今ここで、貴様には死んでもらうのだからな

「私の敗けかあ・・・」

『メイド・イン・ヘブン』!!

『世界』！時よ止まれ!!

『キラークイーン』、時を巻き戻せ!!

『世界』時は再び停止する!!

「姉さん、後何秒だ、何秒時を止めることができる十秒か？三分か？姉さんが止めたと同時に俺はキラークイーンのスイッチを押して止まつた時間を巻き戻す」

「これが、『キラークイーン』第三の爆弾『バイツアダスト』』

「アハハハハハツひれ伏すことしかできないのだって気付かなさいよ、ハア、所詮『決意』だけの人間ね」

「ついにここまで来たぞ邪神!!」

「ええ、その『白金』に勝利を」

「別にいいわ、もし勝つたら共に酒でも飲みましょ」

「ええ、貴女とあえて良かつたわ、ただ悪いことをしたね、私はどうしても人みたい」

「いいの、相棒」

「クレイジーダイヤモンド!!」

「キラーキーン!! 私のディスクを爆弾にしろお!!」

「俺は言つたことは守る男だ、とはいえ、死んだら知らねえ」

「どおしてよ・・・・・どおして」

「二手遅れたようね、マーキュリー」

「『C—MOON』！ 重力は逆転する！」

「『世界』!! 時は止まる」

綺麗な紅い月

とてもじゃないが

絵にはできない。

13 『殺し屋の女王』

紅い月が世界を照らす太陽になり変わつてゐる

人はただ本能でのみ動く肉の人形になり世界は衰退し始める
吐き氣のするような血と肉の臭いが鼻を突き
無惨に捨てられている衛兵が視界に広がり

「や、やめて・・・止めてください!!」

ふと声に気付きその方向を見る

そこでは一人の女性が大男に迫られていた。

おもいついた

「いいじやないか、もうこの世界では力だけなんだ、いまさら喚こうが
無駄なのさ」

「い、いや、いや・・・たす・・・け」

大男の肩を触り爆弾にする。

「まあまあ」

「なんだこのガツ」

めんどくさくなつたから爆発させ内蔵を噴射させる。

破裂したところから出た血が体にかかり少しだけ気分が悪くなつた。

いややつたの俺だ。

「えつとそのありがとうございま」

「ふふ・・・美しい・・・手首か・・・うーん、まあいいか」

切り取れた女の手首を内ポケットに入れそこから立ち去る。

背後にはぐちゃぐちゃに吹き飛んだ内蔵だけであつた。

星がとても綺麗だけどずつと星が出るのも酷かつた。

「・・・はあ、確かに星は綺麗だが、しつこいのも考え方だぞ」「いいじやない」

「よくない、というか、どんどん人間の形が無くなってきたね」

前と違ひ少しだけ髪が伸びもう浮いていないと地面に触れるぐら

いだつた。

瞳ももう虹を通り越して吐き気がする

体はもう肌色から完全な白に

指も隠そうとしているが小指が溶け始めていた。

「・・・『天国の時』はまだなのね」

「知らない、俺はもう興味も失せた」

街道をなんとなく歩き続ける。

目的もなく

意味もなく

ただ黒い風が吹き荒れる中を通る

後ろからゆつくりとついてくる姉を見ず、ただそつと喋る。

「・・・なあ、『何周目』だ」

少し、足音のテンポがずれ察した。

ああ、俺は死んだのか。

これは決められた運命
バイツアダストが作動したのだと

「・・・いつから察したの」

「確定したのは今、疑問に思つたのは初めから、答えるも聞きたいか
？」

「ええ、久しぶりの一人だけの時間だもの」

周囲で死んでいる兵士を無視しながら道を進む。
風は少しづつ強くなり
進む

「まずおかしいに決まっているだろ、スタンンドはあくまで精神の形、そ
う神がどうこうじやねえよ、どうせ『リプレイとか』だろ、そもそも、
姉さんの精神があんなもかと言ふと別だ、鏡の世界で確定したよ、姉
さんの『世界』の真の能力は『全てのスタンンド能力を使用できる』つ
てのはまあ、文字通り『全てを望む』姉さんならあり得るよ、まあ、唯

一の欠点は『スタンドとそれに準ずる能力』はその腕の飾りのようないで刺せば与えられ、そしてそれは回収しないと使用不能になるのだろう・・・でなきやあいつを殺すのに時間を止めてナイフなんざいらねえよ、だまつて魂ごと吹き飛ばせばいい』

「わあせいかい」

「じゃあ次な、まあもう正解は出たな、前の世界では『俺が死んだかディスクになつて死ぬか俺がバイツアダストを作動させてあそこまで戻した』の三択、まあ三つ目はないな、自分で戻せば記憶は残るはずだ、なら残り二つ、まあどつちも死んで別の誰かがバイツアダストを作動させるだけ、ああ簡単だ』

「ほおほお、うんうん、そうね、私が作動させたわ、白を殺したマークリーにやり直しをさせるためにね、前回は普通にオラオラされて私も死にかけたわ、やつぱりあれインチキだよ』

「じゃあなんで持たせたんだよ』

「ナメプ、いやー途中から同じ能力に変化したとき少し、泣きかけたわだから今回はメインのやべーのは全部信頼できる連中に与えたわ』ナメプって

「しゃあない、『天国のついでだ』どこで待つ？そこまでいつてやるよ』「遙かかる旅路すんじやないわよ、それでバイツアダストしたのよ』

「へいへい、重力が軽いところね』

「きけえ』

黒い風が吹き荒れる中を走りながら周囲の世界と溶け込む。

「・・・ハハハ・・・やつぱ軽いわ』

「楽しそうね、本当に・・・』

「それはそうさ、俺は死ぬまで姉さんだけの味方さ、姉さんが楽しいなら俺も楽しい、ただそれだけさ』

薄氷の上を滑りゆつくりと回る。

世界は怨嗟や狂氣で染まつているがとても清々しい。

ああ本当に歌でもひとつ歌つてみたい気分だ

「・・・ねえ、白。もし、全てが終わつたらどうする』

「知らないね、俺はもう白夜である必要はないんだ、誰も望まないなら

俺の仕事も終わりなのさ、少なくとも世界すら望まないならな、そのときは俺が考えて決めるさ」

暗い空から降り注ぐ美しい血の雨に濡れながら奥へと進む。

血で染まつた樹海を抜け

とてもどす黒い悪意で歩く。

「こんな穢れきつた大地・・・滅びれば良いのに」

まつたくだ。

そしてそれをやつた本人が言うのか。

「1ヶ月後、また来るわ」

「こなくていいよ」

軽い受け答えをした後、姉は影に溶け込んで消えてまた一人俺しか残らなかつた。

別にさみしいとかつらいという感情はない。
むしろ理解できなかつた。

ただ少し、肌寒い

いや、これはただ濡れていただけか。

「・・ああ、始めよう姉さん」

俺は一人で行けるだろうか

もし全てを持つていかれても大丈夫だろうか

俺はあいつを突き放したがこの熱はいつまで持つのだろうか

いや、覚悟を決めろ

俺はできている、準備万端さ、運命に逆らうな

この二本の足でたつているだかだやれるのだ

ああまた誰かを殺そう

ひとりひとり

また人生け贅としよう

ああ倒れて砂を噛むのは俺かお前か
地獄への道ずれだ

帽子をいつそう深くかぶり再びいつもの調子で歩き始める

暗い世界に聞こえるのは自分の足音だけであつた

法皇の縁

「ここはどこだろうか。

目的地に向かい道なき道を進み続ける。

野は無数の屍で埋め尽くされ

太陽は上らず

赤い月が常に大地を照らす。

「・・・さて、どう通つたものか」

世界からは秩序が消えた。

人は永久の闘争に明け暮れ滅ぶのみ。

だというのにいまだに神を信じる愚かな信者たちが関所を築いてる。

いつ怪物になるかわからないだろうにそれでなお神を信じすがるその姿勢。

「少し待てばいいか」

関所を無視し近場の街に入る。

街は至るところに破壊された跡があり血痕も至るところに残つているがある程度の人間はまだ理性を持つて暮らしている雰囲気だった。

すこし街中をふらついたあと酒場に入る。

何人か大柄な男や小汚ない奴らはいたがカウンターの席が二つ空いていた為底に座る。

「おや、にいちゃんお若いね」

「いえ、それほどでも」

「ビールとステーキとパンしかないがそれでいいかい？」

「いいですね、お願ひします、代金は？」

「いるないよ、こんなご時世だこんなことをするのはただの気まぐれさ」

そういったマスターは厨房に入り料理を始める。

言つてることも正しいと言えば正しいか。

「・・・何か用ですか」

囲むように立つ小汚ない肉が一斉に拳銃を向ける。

いまここで始めるという合図だろうか。

席を立ち空気弾をリーダーなのだろうか大男に向けて放つておく。

「小僧、こゝは俺たちの縄張りだ！それに・・・なんだその手はやるのか！」

「人の食事の邪魔をするのか？どうでもいいか」

点火し空気弾を爆発させる。

内蔵が吹き飛び綺麗に爆死した奴を見た瞬間周囲の奴等が一斉に拳銃の引き金を引き弾丸を放つ。

『キラーキーン』!!

飛んでくる弾丸を全てつまみ一個一個を爆弾にして指で弾き飛ばし一人一人確実に爆死させる。

「まつたく、もう何人吹き飛んだのだろうか、まあ気にしないでおくか」

「すまないねにいちゃん、久しぶりのまともな客が来てくれたからはりきつてな、ちよいと作りすぎた」

確かにその大きさといい枚数といい普通に三人前だろうか。

まああせる必要もないから冷めないうちにゆつくりと食べる。

すると後ろから「じやまするぜ」

という声と一緒に一人の男が入り隣に座った。

身長は平均男性ぐらいだろうか、170前後ぐらいで服は深緑を主体とした男だった。

「よお、お前があの糞野郎の弟か、探したんだぜ、あの野郎を脅すためになあ」

うるせ

「だつたらどうした」

「俺は転生者つてやつだよ、あの女に騙されたな、なーにが『チートとハーレムあげちゃいます♪ですから協力してください』だ、俺は力こそ貰えたが見ての通り女ひとつ貰えねえ、それどころかあいつに肉の芽を植え付けられた」

自業自得かどうかでもいい

「うん、うめーなこのステーキ、ごちそうさん、旦那
『てんめえ!!』

急に男が立ち上るとオーラを纏い始めそこからスタンンドが現れた。

「俺のスタンドは『法皇』そしてもう結界は張つてある、世辞の句ぐらい言わせてやるから言えよ、なんなら命乞いでもいいぜ」物理攻撃の時点で無駄つて気づかないか。

「そうか、なら、爆死しろ」

結界の一本をさわった瞬間そこが爆発し酒場の一部が吹き飛ぶ。
「はあ、変なのに絡まれた」

席を立つてさつさとその場から離れ、広場に出る。
広場に出た瞬間四方八方からエメラルドスプラッシュが飛んでくる。

「ハツ!! 例えキラークイーンでも全ての弾丸を爆弾にすることは不可能!! 死んでいる貴様にはわかるまいか」

「なんか言つたか?」

全てを叩き落として再び向き合う。

「・・・嘘だろ・・・何しやがつた!!」

「お前こそあれをどう生きたかは知らんが死ぬといい」

スイッチを押し男を今度こそ爆死させる。

「まつたく・・・ん? なにあれ」

爆発したらところからなぜかハイエロファンントの触脚が延び森の奥へ続いた。

取りあえず邪魔されないように森へ入る。

「あ、やべえなこれ」

ある程度進むと巨大な無数の鱗に包まれた龍のような何かがいた。

「やつぱり来たか、我こそは旧四天王レビア、あのゴミの弟であろう?
実に夢き存在よな!!」

不意打ちは基本かいね

あつたまおかしい数のハイエロファンントの弾丸と急に飛び出した千をこえる鱗が全身めがけて飛んでくる。

「ハツハツハツハ、さつきの戦いで貴様の能力は把握済みよ、この攻撃は全て防げまい」

飛んでくる物を防ごうと殴るが数初はそのまますり抜けて膝や心臓に直撃し。

『全て爆発』した。

「はあ、物理攻撃で俺を倒すのは不可能なんだよ、諦めて帰れ」

「な、何が起きた・・・爆弾は一つではないのか!!」

「?・・・言うと思ったか」

飛んでくる全ての弾丸を爆破しゆつくりと歩いて近づく。

近づけば近づくほど弾幕は濃くなり激しさを増すがそんなものは一切無意味というようにその体に手が当たる。

「はいどーん」

触れた瞬間竜はバラバラになり吹き飛ぶ。

同時に法皇も消え、消滅

「キラーケイーンは成長したんだ、確かに爆弾は一発だね、でも、『何度でも使える』爆弾だがね、さあ旅の続きといこうか』

消滅を確認しそつと答えを出してその場を離れる。